

## 第二話 結成

平成 25 年 10 月 23 日(水)

幻想譚工房

長年住んでいた山を下りてシェダルという都会にたどり着いてから三巡、つまり九日が過ぎた。街の生活には少しずつ慣れてきたけど、まだまだ人と話すのは苦手で、私はアヴェンさんの後ろにくっついて歩くような毎日を過ごしていた。

私たちはディスパテルと呼ばれる魔術を使うことができる種族だ。種族と言っても姿形は人と全く同じで、大気中に漂う有害な魔力を魔術という形で体外に排出する能力を持った人がディスパテル、逆に有害な魔力を体に取り込まないようにブロックする能力を持った人がミネルヴァと呼ばれている。

私はこれまで人目につかない山奥でずっと暮らしていたから、人に見られるというのがすごく恥ずかしい。他の人から自分がどう見られているのかを考えてしまうと怖くて人前に出られなくなってしまうのだった。

ゼキルさんやアヴェンさんの他数人とは話せるようになったのだから、少しずつそういう人を増やしていけばいいと彼らは言うけど、物事はそう簡単には行かないものだ。

「カレン、そこの八百屋でトマトとキュウリを買ってきてくれ」

私たちは事ある毎にゼキルさんから買い物を頼まれていた。買い物と言うのは名目で、私を人に慣らすための特訓だということはさすがの私でも分かる。

そのため一日に一度、多い日は午前と午後の二回。最初の二巡はアヴェンさんと一緒に、後の一巡はアヴェンさんが少し離れたところで待っていて、私一人で買いに行くことで他の人と話ができるように特訓をしていた。今日はその四日目だ。

昨日行った物静かな文房具屋さんとはなんとかやり取りをすることができた。この勢いでいけば八百屋さんも大丈夫なはず。

「分かりました」

大丈夫、今日だってやれるはずだ。そう思って八百屋さんの方に駆け出した。八百さんに来るのは今日で二回目だ。この間は大きな声に驚いてアヴェンさんの背後に隠れたままだったから、今日こそは頑張らなきゃ。

「やあ、いらっしやい。何を買いに来たんかい？」

「あ、あの……」

八百さんの大きな声に、さっきまでの私の自信や決意は粉々に打ち砕かれた。心臓が跳ね上がり、顔にかあっと血が昇る。

「お嬢ちゃん、どうしたんだい？」

八百屋さんが私のもとへ近づいてくる。足が地面に張り付いたように固まって逃げることもできない。目の前に立った八百屋さんの体はかなり大きくて、身長も見上げるくらい高い。このまま押しつぶされてしまいそうでだんだん目が回ってきた。

ああ、私はここで捕まってしまうんだ。思えば短い人生だったわ。そう思っていると、八百屋さんは膝をついて静かに話しかけてきた。

「カレンちゃんだね、ゼキルさんから話は聞いているよ。落ち着いて、欲しいものを指差してくれればいい」

私に向かって膝をついて、微笑みまで浮かべている八百屋さんの言葉を聞いて、急に自分が恥ずかしくなった。何もしていないのにお店の人に捕まるわけがないし、押しつぶされるはずもないんだ。それなのに早とちりして慌ててしまうなんて。

「あ、あの……トマトと、キュウ리를」

そっとトマトとキュウ리를指差すと、八百屋さんは袋に詰めてくれた。渡すときも膝をついて恐くないようにしてくれた。

「まいどっ」

「あ、ありがとう……ございましたっ」

お金を払って頭を下げると、走って店を出た。

「ご苦労さん」

少し離れたアヴェンさんのところに行くと、彼はそう労って右手を上げた。こんな様子で人に慣れる日が来るんだろうか、前途多難だ……。

「今日はいつもより賑やかだな」

買い物を済ませてボルグに戻る道すがら、アヴェンさんがぼつりと呟いた。ボルグとはアスモディアボルグの略で、それぞれの街を魔物や侵入者から守るために設置された傭兵業だ。傭兵というと荒っぽいイメージがあるかもしれないけど、実際は街に暮らす人たちのために働く便利屋さんといったところだろうか。

私とアヴェンさんはその一員なのだ。……もっとも四人一組のチームが基本のボルグで二人しか居ない私たちは半人前で仕事をもらえない。だからこうしてボルグの長で叔父さんでもあるゼキルさんのお手伝いをしているのだ。

「本当ですか？ 私にはいつも通りに見えますが」

いろんな店が立ち並ぶこの市場は朝から夕方まで多くの人が行き交っている。それも少しくらい人が増えたり減ったところで分からないくらいに。

「まあ、カレンはまだ人混みに慣れてないからな。ちょっと聞いてみるか」

アヴェンさんに言われたことはその通りだけど、こうして言葉に出されるとちょっぴり悔しい。こうなったらすぐに人に慣れて一人でも八百屋さんまで買い物にいったらいいから。

そこまで考えてふと気がつく、アヴェンさんの姿が見えなくなっていた。

「えっ？」

辺りはたくさんの人で溢れかえり、アヴェンさんの姿は影も形も見当たらない。とてもじゃないけどこの中からアヴェンさんを見つけ出すのは無理に思えた。

「どうしよう……」

心臓が激しく鳴って、息が苦しい。ま、まずは落ち着いて人の少ない裏路地に入らなきゃ。

人の合間を塗ってよろよろと歩き、なんとか人気の少ない裏路地に入った。表通りとは違って変わって辺りは薄暗くひんやりとしている。表通りの建物は一階を商店として使い、二階を居住区にする建物が多いのだ。

「はぁ……」

壁に背中をつけてため息をつく。石の冷たい感触が服を通して背中に伝わる。ここなら少しだけ気持ちを落ち着けることができそうだ。

表通りに目をやると相変わらず多くの人が行き来している。このままじゃ帰れないわ。

途方に暮れていると、声をかけられた。

「お嬢さん、どうしたんだい？」

見ると男の人が二人立っていた。私やアヴェンさんと同じくらいの年だろうか。片方はアヴェンさんと同じくらいの背の高さで濃い緑色の髪、もう片方はそれほど背は高くない濃い青色の髪。二人とも剣を腰に携えているけど、なんて言うんだろうか。そう、ボルグにいる人たちなら絶対にしないような服の着方だ。かしこまってないというか、緩いというか。

どうしよう、少し怖いけど無事にボルグまで帰れるなら頼った方がいいのかな？二人は決めかねている私にさらに近づくと、壁に背をつけている私を取り囲むように立った。

「暇だったら俺たちと遊ばないか？」

心臓が強く打った。さっきの八百屋さんの時よりもずっと強く。二人がどんな人か分からないけど、頭が危ないと強く訴えている。アヴェンさんに会った時とは雰囲気全然違う。この人たちについていったらダメだ。

けれど、二人に囲まれているため逃げ出すこともできない。アヴェンさんもない。今度こそ本当に捕まってしまうかもしれない。そんな思いが頭をよぎった。

なにか言おうにもものどの奥がキュッとしまっていて声が全く出ない。

怖い。怖くてなにもできない。

青い髪の方が私の腕を掴んだ。

「いやっ……」

「やめろ、嫌がってるじゃないか」

男の人たちの背後から声が聞こえた。見るともう一人男の人が立っていた。背は私より少し高く、金色の短い髪の爽やかそうな青年だった。

青緑色の瞳が二人の事を睨んでいる。

「なんだ、こいつ。痛い目に遭いたくなかったら消えな」

青い髪の方が挑発的な声で言い放ち、剣を抜いて構えた。

金髪の青年も遅れて剣を抜いた。けれど、その剣は普通じゃなかった。剣は青寒い光を放ち、彼の体をわずかに照らしていた。

刃からは冷気がゆっくりと流れだし、足元がひんやり涼しくなった。

「僕の剣は魔物専用だ。氷漬けにされてもいいならかかっておいで」

金髪の青年は剣をゆっくり構えると、微笑みを浮かべながら二人をじっと見据えた。青年は確かにほほえんでいるけど、青い光に照らされたその顔はとても冷たく見えた。辺りの冷気も相まってまるで背中筋まで凍り付きそう。

「何だこいつ……」

青髪の青年がさっきと同じ言葉を発した。けれど、今度の声は挑発ではなく、明らかに恐れているような声だ。

「ちっ、こいつはヤバそうだな。逃げるぞ」

緑髪の青年がそう言うと、青髪の青年の腕を引っ張って路地の奥の方に走り出した。

「大丈夫かい？」

完全に姿が見えなくなってから、金髪の青年は剣をしまった。

さっきまで出てた冷気はいつの間にか無くなっていて、剣も普通の剣になっている。

「あれ、剣が普通に」

「ああ、これ？」

青年が剣をもう一度引き抜き、私に見せた。

「なんて事はない、ただの剣だよ。さっきのは魔術で冷気をまとわせただけ」  
そういうとぼそぼそと口を動かした。するとさっきみたいに剣から冷たい空気が流れ出してきた。

「剣が苦手だから、こうして小細工しないと」

それを見て、足の力が抜けて地面に座り込んでしまった。

「驚かして悪かったね、でも放っておけなかったから」

青年がそう言いながら剣を再びしまうと、にっこり笑って手を差しのべてきた。

「僕の名はジニア、ところで君はどうしてこんな所にいたんだい？」

ジニアさんの腕につかまって道を歩く。なんとジニアさんはボルグに向かう途中だった。近道を行こうとして裏通りを歩いていた時に私たちを見つけたそうだった。私もこのままでは帰ることができないので、道案内をかねて一緒に行くことになった。ただボルグに行くためには結局表通りを通らなければならず、仕方がないので道のはしっこを歩くことにした。

腕につかまったのはもう絶対にはぐれたくないからだ。あんな怖い思いをするくらいなら助けてくれた人の腕の方が絶対良い。

「それじゃあ、ジニアさんは剣の修行のためにこの街まで来たんですか？」

「そうだよ。魔術はそこそこ得意なんだけど、魔術を専門にするわけにはいかないんだ」

「魔物……ですか？」

さっきも剣を抜いたときに魔物専用って言った。

魔物とは、私たちディスパテルのように魔術を使う、もしくは魔力の影響で体に変質した生き物の事だ。多くの魔物は私たちと一緒に体は丈夫ではないけど、魔術を使って狩りをするから、私たちでも対処に手を焼く事が多いとお父さんに聞いた事がある。

「町や村には結界が張ってあるけど、町から町を渡る商人たちは常に魔物に襲われる危険がある。それでも物を行き渡らせるために命を懸けて平野を渡らなきゃいけない。僕はそんな人たちの力になりたいんだ」

ジニアさんは立派だなと思った。ちゃんと自分のやりたいことを見据えてる。

「それに、……もあるしね……」

「え、なんて言ったんですか」

「あーほら、ボルグに着いたよ」

門の前にはアヴェンさんが立っていた。アヴェンさんは私の姿を見つけると、慌てて駆け寄ってきた。

「カレン、無事だったか」

「はい、ジニアさんに助けてもらいました」

私がこれまでのいきさつを話すと、アヴェンさんはジニアさんに深く頭を下げた。

「カレンを助けてくれて感謝する。元はといえば見失った俺の責任だ。俺にできることなら何でもお礼をさせてくれ」

「いや、そんなお礼だなんて」

ジニアさんは丁重に断ったけど、アヴェンさんもこのままではいけないといった感じだった。アヴェンさんのおでこを見ると汗がにじんでいた。きっと私を

必死に探してくれていたのかもしれない。

私からもお礼がしたい……とそこまで考えて、あるアイデアが浮かんだ。

「そうだ、ジニアさんもボルグで働きたいそうなんです。同じチームで働けるようにゼキルさんに話してみましようよ」

「そうだな、カレンを守ってくれるくらい腕が立つなら安心だ」

お礼かどうかは分からないけど、ジニアさんがボルグで働きやすいようにお手伝いができればと思った。

「話は大体わかった。ジニア・リネアリスと言ったね。見た感じ18歳ってところかな」

「すごい、その通りです。どうして分かったんですか？」

場所は変わってゼキルさんの執務室。私とアヴェンさんの紹介ということで私たちも一緒に執務室で話を聞くことになった。

「なに、長年こうして人を見てると、少し話をしただけでおおよその年齢が分かるんだよ」

驚いたジニアさんに対して、ゼキルさんは優しい表情で言った。

「さて、じゃあプリムラコードを読んでもらうとするかな」

ゼキルさんが紙を出してジニアさんに渡した。プリムラコードとは、私たちディスパテルの力量を見極めるために書き下ろされた特殊な詠唱文だ。ディスパテルであれば誰でも魔術を使うことができるけど、その能力の強さは人によって異なる。それをプリムラコードで測るのだ。

ジニアさんはゼキルさんからコードの紙を受け取ると、すぐにコードを読み始めた。

詠唱文と言っても派手な魔術ではなく、大気中の魔力を体に取り込んで無意味な変成をして体外に放出するという魔術としては意味のないものだ。コードは下に行くほど一度に扱う魔力の量が増えていき、最終的には自分の限界のところで魔術が止まる。ジニアさんの結果は真ん中より少し後ろくらい、中級魔族の中でも上位の方だった。

そんなに魔術の才能があって、しかも剣が扱えるなんてジニアさんはすごい人だ。

読み終えたあと、ジニアさんは得意気に鼻を擦った。

「ほう、魔力適正は良いな。あと一人前衛がいればチームとしてバランスが取れそうだ」

「僕は前衛志望です。剣の修行のためにここまで来ました」

ゼキルさんの言葉にジニアさんがピクリと反応して言い返した。

「お、そうなのか？ 剣を使う体格には見えないけど」

ゼキルさんは驚いた表情をしたが、すぐにジニアさんの腰に差してある剣を見ると、部屋の隅にある傘立てからジニアさんの持っている剣と同じくらいの大きさのものを二本取り出した。そのうち片方をジニアさんに手渡した。

「修行に来たからには少しはできるんだらうな？」

ゼキルさんは半信半疑といった様子でゼキルさんに対して半身になり、右手のみで剣を構えている。

一方ゼキルさんは自信満々といった感じで、剣を両手で握り直すと青眼に構えた。

ふうっと部屋の中が静寂に包まれた。お互いに睨み合った状態で対峙している。いや、睨んでいるのはジニアさんだけだ。真剣な眼差しでゼキルさんを見つめ、いかなる動きも見逃さないといった様子だ。

反対にゼキルさんは相手を見てはいるが、真剣な表情とは言い難かった。例えるなら早く仕掛けてこないかと待ちくたびれているようにも見えた。

その状態で2分が経過した。痺れを切らしたゼキルさんの木刀が上がった。その直後一気に詰め寄り、ジニアさんの頭上に向かって降り下ろす。

バンッ

木刀が激しくぶつかり合う音が響く。ジニアさんは中腰に落として木刀を頭上に構えて打ち込みを止めると、そのまま腕を回し上段から袈裟斬りにしようとして振りかぶった。しかしゼキルさんはそれよりも一瞬速く木刀を左に払い、腰を深く沈めてもう一步踏み込みながら、ジニアさんの胴を鋭く尻ぎ払った。

ジニアさんは身をよじって避けようとしたが、脇腹を掠られバランスを崩した。少しよろめいたが何とか踏み留まって体勢を立て直したジニアさんは木刀を上段から降り下ろす。しかしゼキルさんは後ろに軽く跳躍し避けた。木刀が空を切り床に当たった時には既に一度踏み込まれ、ジニアさんの肩に木刀を降り下ろしていた。

木刀が肩に当たってジニアさんが木刀を取り落とした。カランという音が部屋に響き渡る。あっという間に勝負がついた。

「剣の腕を見てるんだから打ち込んでこないと分からないだろう」

ゼキルさんが腰に手をあてて言った。

「本当にこの程度で前衛を志望してるのか？ お前さん死ぬぞ」

がっくり肩を落としてうなだれるジニアさんに、ゼキルさんが徽章を手渡した。

「魔術の才能があるんだからそっちを伸ばした方が良い。正義と誠実の名のもとに活躍を期待しているよ」

ジニアさんはそれを受けとると、私たちと同じように左の襟に取り付けた。

「さて、入ってもらうのはいいけれど、ペルディータは基本的に四人一組で行動するのが規則だ。ジニアを加えてもまだ一人足りないんだ。しばらくは三人

で雑用をしてもらおうようになるけど、それでも良いかな？」

「それでも構わないです」

「決まりだね。前衛が一人、後衛が二人だからもう一人前衛がほしいところだな」

「……僕は前衛志望です」

「それだったら最後の一人が決まる前に剣の腕を磨くんだな」

「うぐっ……」

「大丈夫ですよ、きつとうまくいきます」

だって私を助けてくれたときのジニアさんは本当に強そうだったから。

「ありがとう」

がっかりとうなだれたジニアさんが立ち直ったところで、アヴェンさんが思い出したように言った。

「そうだカレン。さっき町が賑やかだと言ったけど、近々浄化祭があるそうだ」

「浄化祭？」

そう聞き返すとゼキルさんが手をポンと叩いた。

「お、そろそろそんな時期か。人がたくさん来ているんな出店があって、賑やかで楽しいんだ」

「ええ……、人がたくさん来るんですか……」

今の商店街を通るだけでも息が詰まりそうなのに、それがもっと増えるなんて……。

今度は私のがっかり肩を落としてしまった。

「カレンちゃん、ちょっと出掛けようか」

「はい」

それからジニアさんとアヴェンさんは毎日中庭で修行に打ち込むようになった。それも朝から晩まで。ジニアさんが必死なものもあると思うけど、アヴェンさんも久々に剣の修行ができるからと喜んでいるようだった。代わりに手持ち無沙汰になった私は近くのベンチに座って魔法の勉強をするのが日課になった、最近はいろんな事があって山に住んでいた時みたいに勉強ができなくなったから、これはこれでちょうど良い機会かもしれない。アヴェンさん達と外に出かけられないのは少し残念だけど。

その代わり、ゼキルさんが一日に一度外に連れていってくれるようになった。その間の仕事はペネームさんというボルグの副長に押しつけてるらしく、時々お説教を受けているみたいだけれど……。

ペネームさんはボルグ「シャルギエル」の副長で、ゼキルさんの右腕にあたる人だ。私も何度か見ただけで話をしたことはないけど、髪の長い綺麗な女の人



だった。凜とした雰囲気をもとっていて、とても頼りになりそうな格好いい人だ。

「街の雰囲気には慣れたかい？」

「少しずつだけど、街に出ても平気になりました。……まだ一人は怖いんですけど」

「そうか、それは良かった」

この間はゼキルさんが八百屋さんに話しを通してくれたお陰で買い物ができたのだ。……もしかしたらこれまで買い物を頼まれたお店すべてに話をしてくれたかもしれない。

「あの……浄化祭はどんなことをやるんですか？」

話を変えて浄化祭の事について聞いてみた。人がたくさん集まるのは怖いけど、お祭りの話をしてる人たちはみんな笑顔になる。一人として嫌な顔をしないお祭りは、もしかしたら私でも頑張れるかもしれないと思った。

「それぞれの街や村には結界が張られていることは知っているね」

「はい、魔方陣を使っているんですね」

「その通り。正確には地域保護結界と呼ばれていて、街に魔物や過剰な量の魔力が入り込まないようにするために張られているものなんだ。結界は全て魔方陣で作られていて、目に見える魔術のなかでは最大規模のものだ」

魔方陣は固定配置しかできない反面、陣と魔力が残っている限り永続的に作動させることができる。だから結界のように特定の場所を守ったりする魔法とは相性が良いと昔おと一さんに教わったことがあった。

そういえばおと一さんが地上と家を行き来するのにも魔方陣を使っていたっけ。

「一度作ってしまえばずっと使い続けられる便利な魔方陣だが、時間が経つごとに魔方陣に魔力の残りかすが蓄積されていくんだ。魔力が溜まると土地が汚染されて我々が暮らすことができなくなってしまう」

「あっ、もしかしてその残りかすを浄化するのが浄化祭なんですか？」

「さすがカレンちゃん、その通り。最近は技術も進歩してちょっとやさっとじゃ汚染されにくくなったけれど、一年に一度の大きなお祭りはこうして続いているのさ」

魔方陣の浄化についてはおと一さんから教わったことがなかった。おと一さんから私には使う機会がないからと言われて勉強する機会がなかったので、魔方陣についてはさっきのような事くらいしか知らないのだ。

「おっと、ここだ」

ゼキルさんが突然立ち止まった。正面には素敵な佇まいの建物が建っていた。石でできている建物が多い中、このお店は木で建てられている。それだけでも珍しいのに、扉や窓には大きなガラスが張られていて、中の様子が外からよく

見えた。

服がたくさんかけられていて、せっせと手元で何かを動かしている男の人が見える。

ゼキルさんが扉を開くと、カランカランと音がした。

「いらっしゃい」

男の人がめがねを指で刷り上げながらこっちを見る。膝の上に濃いブラウンの布地を掛けて、それに針を通していている。どうやら服を縫っている途中だったようだ。

「ゼキルか、ちょっと待っててくれよ」

男の人はゼキルさんを見ると、何も言わないのに席を立て、店の奥に入ってしまった。

「知り合いなんですか？」

「ああ、昔からの腐れ縁で、この洋裁店の店主だ」

「ほうほう、その子が例の。よく似合いそうだ」

店主が紙袋を抱えながらやってきた。私を一目見てゼキルさんにニヤリと笑いかける。

「そうだろう？ この子が自慢の姪っ子だ」

ゼキルさんは荷物を受け取ると、お金を払って店を出た。

「いったい何を買ったんですか？」

「祭りが来たら教えてあげるよ」

包みの中には何が入ってるのか分からないけど、大きさのわりには軽そうだ。お店の中には服がたくさん並んでいたし、もらったのはお祭りに必要な服なんだろうか……。それに私に似合いそうだって……。

ドンッ

考え事をしていると、人にぶつかってしまった。

「あっ、ごめんなさい」

その人は私より背が低かった。日に焼けた栗色のフードを被っていて顔までは見えなかったけど、身長よりも長くきれいな細工の施された銀色の杖を持っていた。杖の先端には緑色のきれいな宝石がはめ込まれていて、日の光を受けて細工の周囲を淡く緑色に染めていた。

「わぁ、きれいな杖」

その人は私の方に向き直るとそのまま動きが止まった。フードの隙間から見えた口元が驚いたように開き、杖を持つ手がぎゅっと強く握られた。

「あ……」

その人は小さな声を上げると慌ててフードを後ろに追いやった。杖に取り付けられた宝石と同じくらい鮮やかな緑色の瞳がはっきりと私をとらえている。私

より年下の女の子だった。緑色の髪がふわりと揺れ、驚いたように目を見開いている。

「お姉ちゃんっ！」

その子はそう叫ぶといきなり私に抱きついてきた。

「え……えっ？」

その子は私のことをぎゅっと強く抱きしめて離れようとしな。それに私がお姉ちゃんで……。

ゼキルさんの方をみると、私のことを見て笑っていた。しかも本気の笑いだ。助けてくれそうにないので、仕方なしに今私に抱きついてる子に向き直る。肩に手を乗せると、ぴくりと反応した。

「ね、ねえっ。お名前を聞かせて？」

「……リーチェ」

か細い声で名前を言うと、その子はようやく離れてくれた。目が少しだけ潤んでいた。

「リーチェちゃんね、私はカレン」

「ごめん、お姉ちゃんにそっくりだったから」

「私がお姉ちゃんに似ているの？」

そう言うと、リーチェちゃんはこくりと頷いた。

「もしかしてお姉ちゃんとはぐれちゃった？」

その問いかけにリーチェちゃんは答えず、黙って私の腕にすがりついた。ぎゅっと腕が抱きしめて、私に体を預けてきている。私の右半身がぐいっとリーチェちゃんの方向に傾いた。

「あの、リーチェちゃん？」

このままじゃ歩けないんだけど……。もしかしてリーチェちゃんのお姉ちゃんが見つからないとずっとこのままなのかしら。

「ゼキルさん」

ゼキルさんは相変わらず笑って見てるだけだった。

「リーチェ・バレリア」

リーチェちゃんはゼキルさんにそうぶっきらぼうに答えた。どうしても離してくれなかったので結局ボルグまでついてきてもらったのだ。

ボルグまで一緒に行く間、リーチェちゃんはずっと無言だった。時々私の腕につかまり直すようにするたびに私の体が右側に引っ張られて、ボルグにたどり着く頃にはすっかり右肩が痛くなってしまった。それでも、お姉ちゃんとはぐれて心細い思いをしているリーチェちゃんに比べたらこのくらい何て事ない。ゼキルさんの執務室に到着した今でも私の腕を掴んで放してくれないので、机

を挟んで向こう側に座っているゼキルさんに対して一緒に並んで立っているような状態だった。

「そうか、リーチェちゃん。お姉さんがいると言ったけど、この街にいるのかい？」

ゼキルさんの問いかけに対してリーチェちゃんはふるふると首を振った。ということはご両親と一緒になのかしら。どちらにしても早く家族を見つけてあげたい。

「カレン姉が今から私のお姉ちゃんなの」

「えっ？」

リーチェちゃんが言った予想外の言葉に驚いて声が出てしまった。

「えっと、リーチェちゃん。本当のお姉さんは？」

「私は魔法の修行をするためにこの街に一人で来たの。そしてこの街にいる間はずっとカレン姉のそばにいる、そのためだったら何でもするわ」

さっきまでのおとなしい雰囲気とは打って変わり、全く真逆の気の強そうな子がそこにはいた。

「我々が何をやる組織か分かっているのかな？」

「もちろん。ここはアスモディアボルグでしょ、私の魔術で魔物なんて灰にしてやるんだからっ」

そう言ってリーチェちゃんは杖をゼキルさんに向けた。もしかして大変な子と出会ってしまったのでは。

「……まあいい、じゃあとりあえずこれを読んで」

そう言うとゼキルさんはプリムラコードを取り出してリーチェちゃんに渡した。

「ふん、プリムラコードで魔術師のレベルを測るなんて」

彼女はコードの紙を受け取ると、息を吸ってすぐに読み始めた。

リーチェちゃんはものすごい早口でコードを読み進めていた。普段ならゆっくり進む魔術の反応が急激に進み、リーチェちゃんの体は眩しい光に包み込まれる。

ものすごい早さなのに、一語一句間違えることなく正確にコードを読んでいる。果たしてこんな速度で精度の高い詠唱を行える人が一体どのくらいいるだろうか。

前半と中盤をものすごい勢いで読み飛ばし、コードは後半にさしかかろうとしていた。だんだんリーチェちゃんの体を包む光がゆっくりと弱まっていく。それでも彼女はコードを読むのをやめなかった。

顔に汗の珠が浮かび初め、苦しそうな表情でコードを読み続ける。光は弱々しく彼女の周囲を照らし、今にも消え入りそうだった。コードを読むペースは明らかに落ちて、一文一文をたどたどしく読み上げるので精一杯だ。そして突然

彼女の体が地面に崩れ落ちた。

「リーチェちゃん！」

「けほっ、けほっ」

リーチェちゃんは膝と両手を床について、激しく咳き込んだ。それでも床に落ちたコードに手を伸ばそうとしている。

「もうやめて」

そう言いながらリーチェちゃんのことを思わず抱きしめていた。これ以上コードを読み続けたら体を壊してしまう。魔力は体に有害なのだ。体の許容量を超える量の魔力を無理矢理取り込むと最悪死んでしまうこともある。

「……カレン姉」

「無理して全部読む必要は無いの、リーチェちゃんはよく頑張ったわ」

「まったく、無理をする娘だな」

「プリムラコードが全部読めなくたって、私には強力な魔術があるの」

強気な言葉とは裏腹に目を潤ませながら杖を構え直すと、即座にリーチェちゃんの周りを赤い光が包み始めた。

「分かった、分かったからその物騒な魔術を止めるんだ」

ゼキルさんが両手を上げて降参するようなポーズを取った。

「もう遅い」

リーチェが杖をトン、と付いた途端辺りがまばゆい光に包まれ、すぐにお腹に響くくらい大きく低い音が鳴って視界が真っ暗に閉ざされた。それが煙だと気づいたのは数秒経ってだんだんと煙が晴れてきてからだ。結界を張る間も無いくらい突然の魔術だったけれど、何故か私の体には結界が張られていた。次第に煙が晴れて部屋の中が見渡せるようになってきた。入り口の扉は跡形もなく吹き飛ばされていて、横壁には大穴がぼっかりと開けられていた。そこから街の鐘楼が見えた。リーチェちゃんは炎の魔術で部屋を爆発させたのだ。

「……すごいわ、こんな威力の魔術をたったわずかな時間で唱え終えるなんて」

「でしょ？ 私にかかればこのくらいどうってこと無いわ！」

「そこ、感心してる場合かっ！」

自信満々に胸を張るリーチェちゃんに対してゼキルさんがコツンと頭を小突いた。私たち三人の他に本棚や机など部屋中の家具や置物から放たれていた保護結界の淡い光がふわりと消える。中のものには傷一つ付いていない。私たちに張られた結界はゼキルさんが唱えたものだったのか。

「まったく、そんな無茶苦茶な魔術の使い方じゃ長生きできないぞ……」

そう言いながらゼキルさんは背後の棚に向かった。結局リーチェちゃんも仲間に入れることにしたようだった。あんなすごい魔術を短時間で唱えてしまうのだ。リーチェちゃんの言うとおり魔物討伐にはうってつけた。

「構わないわ、私はもっと強い力が使えるようになりたいの。そのためなら寿命なんて短くたって良いわ」

「支部長、どうしたんですか？ この部屋の惨状は」

副長のペネームさんが血相を変えた表情で駆け込んできた。そのほかにも大勢の人が次々と執務室の前に集まって来て人だかりができ始めていた。

「ああ、何でもない。ちょっと部屋が破壊されたが、優秀な魔術師が入ってくれた」

「これがちょっとで済みますか」

「カレン、無事か？」

ジニアさんとアヴェンさんが人混みをかき分けて部屋の中に入ってきた。

「アヴェンにジニアか。喜べ、最後のチームメンバーが入ってくれたぞ」

「本当ですか？」

リーチェちゃんがすたすたと二人の前まで歩いて行った。

「リーチェ・バレリア。あなたたちがカレン姉のチームメンバーなのね、これからよろしく」

そう言うと二人と握手をする。その後ろ姿を見ていると、ゼキルさんがそっと私に耳打ちした。

「魔力の才能は確かだが手をつけられん。カレンちゃん、君があの子を制御してくれ」

制御って……。こうして私たちのチームはめでたく？ 結成となったのだ。